夏目漱石「琴のそら音」

――「催眠術」と心霊学

藤尾健剛

一

「琴のそら音」（明38・5）の「余」は、津田君の下宿からの帰途に、許嫁の露子の死を予感する。予感を促したのは、「今本郷から小石川の方へ向いて動くのは甚だよくない、屹度家内に不幸がある」、「若い女に祟る」という、婆さんの伝える易者の言葉をはじめ、「（犬の―藤尾）あの鳴き声は只の鳴き声ではない、何でも此辺に変があるに相違ないから用心しなくてはいかん」という婆さんの言葉、「僕の親戚の者が矢張りインフルエンザに罹つてね。別段の事はないと思つて好加減にして置いたら、一週間目から肺炎に変じて、とう〳〵一ヶ月立たない内に死んで仕舞つた」という津田君の言葉、途中で出会った棺や「昨日生れて今日死ぬ奴もあるし」という人足の言葉、不意に消えた提灯の明かり、「悪るいから御気を付けなさい」という巡査の言葉などである。とりわけ提灯の灯が闇のなかに突然吹き消すように見えなくなったのが、直ちに許嫁の死を連想させた。太田三郎は、このような経緯に関して、「こういう風に段々と一種の自己催眠の状態におちいってゆくのである」[1]と指摘している。しかし、「余」が催眠（トランス）状態に陥ったわけではないので、「自己催眠」というよりも、「自己暗示」という方が適当であろう。

留学中の一時期、漱石が「スタンダード」新聞を読んでいたことは、「倫敦消息」（明34・5、6）で言及しているが、その明治三五年（一九〇二）一〇月一六日の記事の一節に、「遠吠えする犬、光のあるはずのない場所での光、泣き叫ぶような音、棺の幻影、葬列、これらは、すべて死――特に突然の死、もしくは早すぎる死――が近くに迫っている前兆である」とある。これは、魔術について論じたジョン・グレゴーソン・キャンベルという人の著書に対する書評の一部である。漱石がこの記事を読んで記憶にとどめていたというのではないが、同じ種類の知識が漱石にもあって、「琴のそら音」に活かされたのかもしれない。

『心理学事典』（中島義明編、平11・1、有斐閣）をひもとくと、「暗示」について、「対人的な影響過程の一種で、〝認知〟、〝感情〟、〝行

動〻面での変化を無批判に受け入れるようになる現象、またはそのような現象を引き起こすための刺激、その際の心理過程をいう」と説明されている。催眠術の場合など、普通には暗示を与える他者が存在するが、「余」の場合は、特定のだれかに唆されたわけではないのに、許嫁の運命に関する見方の「変化を無批判に受け入れ」たわけで、「自己暗示」の範疇に入れるべきものだろう。

末尾の床屋のくだりで、有耶無耶道人著『浮世心理講義録』の一節が読み上げられる。そのなかで、人をばかす狸が、「俗人は拙が作蔵を婆化した様に云ふ奴でげすが、そりやちと御無理でげせう。作蔵君は婆化され様、婆化され様として源兵衛村をのそ〳〵して居るのでげす。その婆化され様と云ふ作蔵君の御注文に応じて拙が一寸婆化して上げた迄の事でげす」と語っている。それを漏れ聞いた「余」は、「して見ると昨夜は全く狸に致された訳かな」と自嘲している。さまざまな因子に惑わされて、許嫁の死というありもしないメッセージを聞き取った点で、進んで「婆化され様」とした作蔵君と似た結果に陥ったといえよう。同じ箇所に、「みんな神経さ。自分の心に恐いと思ふから自然幽霊だつて増長して出度ならあね」という言葉もある。幽霊現象一般が自己暗示の生み出す幻覚ということになるだろう。

漱石は、『吾輩は猫である』（明38・1～39・8）の二で、いわゆる霊の感応の現象をパロディ化している。水島寒月が聞こえるはずのない金田の娘の声を耳にし、橋の上から声のする川の方向に飛び込もうとしたところ、橋の真ん中に落ちるという滑稽化されたエピソードが書き込まれている。たとえば、シャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』（一八四七）で、遠くへだたった場所にいるはずの恋人の声を主人公が耳にするシーンのようなロマンティックな場面が茶化されていると見てよいだろう。

「琴のそら音」も、似た動機で書かれた作品ではないだろうか。同じ『漾虚集』（明39・5）に収められた「趣味の遺伝」（明39・1）が神秘的な一目惚れを、「遺伝」という観点を導入することで脱神秘化したように、「琴のそら音」では、心理学的な「暗示」の観点から、同じくはなはだロマンティックな霊の感応を脱神秘化しようとしたのではないだろうか。

しかし、「琴のそら音」には、このように理解するのに障害となる一節が存在する。津田君が語る次の箇所である。

「ある朝例の如くそれ（懐中鏡―藤尾）を取り出して何心なく見たんださうだ。すると其鏡の奥に写つたのが――いつもの通り髪だらけな垢染た顔だらうと思ふと――不思議だねえ――実に妙な事があるぢやないか」

「どうしたい」

「青白い細君の病気に窶れた姿がスーとあらはれたと云ふんだがね――いえ夫は一寸信じられんのさ、誰に聞かしても嘘だらうと云ふさ。現に僕抔も其手紙を見る迄は信じない一人であつたのさ。然し向ふで手紙を出したのは無論こちらから死去の通知の行つた三週間も前なんだぜ。嘘をつくつたつて嘘にする材料のない時ださ。夫にそんな嘘をつく必要がないだらうぢやないか。死ぬか生きるかと云ふ戦争中にこんな小説染た呑気な法螺を書いて国元へ送るものは一人もない訳

ださ」

（中略）

「尤も話しはしなかつたさうだ。黙つて鏡の裏から夫の顔をしけ〳〵見詰めたぎりださうだが、其時夫の胸の中に訣別の時、細君の言つた言葉が渦の様に忽然と湧いて出たと云ふんだが、こりやさうだらう。焼小手で脳味噌をじゆつと焚かれた様な心持だと手紙に書いてあるよ」

（中略）

「それで時間を調べて見ると細君が息を引き取つたのと夫が鏡を眺めたのが同日同刻になつて居る」

「訣別の時、細君の言つた言葉」とは、「もし万一御留守中に病気で死ぬ様な事がありまし」たら、「必ず魂魄丈は御傍へ行つて、もう一遍御目に懸ります」というものであった。

この後、津田君は、この挿話に関して、「此本にも例が沢山あるがね、其内でロード、ブローアムの見た幽霊抔は今の話しと丸で同じ場合に属するものだ」と述べている。塚本利明は、「ロード、ブローアムの見た幽霊」が出てくる本を、アンドルー・ラングの『夢と幽霊の書 *The Book of Dreams and Ghosts*』（一八九九）だと指摘している。[2]

同書には、「死の床にある者が遠くに姿を現すというのは、実に頻繁に聞かれる話で」[3]云々とある。「遠くにいる生者や死にゆく者の幻影は、複数の人に伝わることもある。テレパシーの理論、すなわちひとりの生者の心からもうひとりの心へ未知の手段によってメッセージが送られるという理論を受け入れれば、それも説明がつく」とも述べている。

『夢と幽霊の書』には、確かに「ロード、ブローアム」（ブローアム卿）のエピソードが記されているが、彼と友人が交わしていたのは、「ふたりのうち先に死んだほうがもうひとりの前に幽霊となって現れ、『死後の生』に関するもやもやを晴らそうではないか」（第五章）という約束であった。一方、やはり塚本が言及しているフランク・ポドモアの『幽霊と意思伝達 ――テレパシーに対する証拠の吟味 *Apparitions and Thought-Transference: an Examinations of Evidence for Telepathy*』（一八九四）の方には、死ぬときには会いに行くと語っていた人が死に際に約束通りに現れた例が二つ記されている（二五二頁、二六五頁）ので、そちらも参考にしている可能性が高い。よりシンプルな後の方を紹介すると、一八八一年四月の最初の木曜日に、マシュー・フロスト司祭がお茶の時間に妻と話していると、窓のあたりで叩音が聞こえ、祖母の姿が見えた。しかし、家の周りを探してみても、だれも見えない。後に、叩音を聞いた三十分ほど前に祖母が亡くなっていたことが分かった。「シジウィック教授は一八九二年六月にフロスト氏を訪ね、氏が一八七八年に祖母に最後に会ったとき、可能なら死に際に氏に会いに来ると約束していたことを教えられた」。

『夢と幽霊の書』には、一カ所だけサイドラインが見える程度で、ブローアム卿のエピソードを語った部分を含めて、漱石の書き込みはほとんど残されていない。『幽霊と意思伝達』の右の箇所も同様に書き込みは見えない。このポドモアの本で書き込みがなされているのは、末尾の「理論と結論」の数頁だけである。次

に該当箇所（三八四～三八六頁）を、適宜省略を挟みながら引用する。漱石の書き入れのある部分は、原文も引いておく。

意思を伝達させる様式に関して、第一に流体の理論がある。これはその起源をメスマーに負っており（a fluid, which owes its origin to Mesmer）、流体が科学界でまだ流行していたときは、ひっぱりだこであった。バレティ博士は、最近新しい形式で流体説を復活させた。彼は催眠術の施術者の目や指、胸から放射され、被験者にさまざまな効果を及ぼすことのできる神経エネルギーが存在すると申し立てた。（中略）しかし、神経エネルギーの顕著な効果を考察するのに長くかかずらうには及ばないだろう。というのも、言葉かテレパシーかによる暗示によって容易に説明できるからである。

流体と放射される神経エネルギーを除けば、テレパシーによる伝達に対して提起される実質的に唯一の様式が残されることになる。すなわち、大脳以外の身体部位がテレパシー伝達に必然的な形で介入していないならば、作用主体の思想や感覚に随伴する物質的変化が、大脳から介在する媒体中の波動として伝えられ、こうして他のだれかの脳内に対応する変化を引き起こすという方法によってである（the physical changes which are the accompaniments of thought or sensation in the agent are transmitted from the brain as undulations in the intervening medium, and thus excite corresponding changes in some other brain, without any other portion of the organism being necessarily implicated in the transmission.）。この仮説は、オショロヴィック博士に、その最も哲学的な擁護者を見いだす。彼は著書『心的暗示』で、この問題に関するさまざまな理論を論じるのに数章を当てている。彼は、私たちの知っているあらゆる物質的な力が相互転換可能であることを想起させることから始めている。博士は、彼が可逆性の法則と呼ぶ、光線電話の説明によって例証される法則にとりわけ注目している。光線電話（photophone）は、鏡が人間の声に振動するように作られた器械である。鏡が光線を反射し、今度は光線が振動しながらセレニウムの皿に到達し、電導率を変化させる。こうして生み出された断続する電流が電話を通して伝えられ、話された元の音声が再生される。（中略）正統派の科学は、神経エネルギーに、唯一の出口しか認めていない。すなわち運動神経である。運動神経は、暗いランタンにあいた光を逃す穴である。電気バッテリーの化学的エネルギーが電解槽内にとどまっているのとちょうど同じように、思想は大脳内にとどまっているが、一つひとつの思想は、大脳外の対応するエネルギーによって代表されている。バッテリーの場合には電流と呼ばれているが、思想に対応するエネルギーは、まだ名前を与えられていない。いずれにせよ、大脳のメカニズムの複雑な運動のすべてを代表する、何らかの対応するエネルギーが存在する。というのは、運動神経の流れは、大脳エネルギーの唯一の動態的相関物を構成していないし、構成しえないからである。

純粋に生理学的な側面から考えれば、このような考え方に格別な難点があるとは思えない。あるいは、むしろ、より正確に言えば、神経過程の究極的な性格に関する私たちの無知がほとんど完璧に近いので、克服しがたい障害に遭遇する危険を冒さずに、事実とは無関係な形で理論を組み立てるのを許しているのである。G・スタンリー・ホール教授がテレパシーに関するこのような物質的理論を論評して、十二分に確立している物質的法則が無視されていると指摘しているのは事実である。「ヨーハン・ミュラーによって完全に定式化された「隔絶化された伝導性の法則」'The law of isolated conductivity'は、ヘルムホルツがその重要性において重力の法則に比肩したもので、一つの神経繊維から別の繊維へ印象が跳び移ることは決してないと主張することで、神経学の領域に秩序を初めて打ち立てた法則である。一つの神経への強い刺激がそれと近接する別の神経に影響を及ぼすことはありえないというのに、ある神経状態が一つの脳から非常に隔たった別の脳に跳び移ることが起こりうるだろうか」。しかし、問題の「法則」が観察された事実から一般化されたものにすぎず、しかも目下議論になっているのとは次元の異なる事実からであるのは明らかである。というのも、ここで問題なのは、同一の身体内の別の神経繊維への影響ではなく、別の身体内の神経中枢への影響だからである。加えて、同一の神経系統に属する神経間で感応が生じないのは、論理的に考えても、蓋然性が高いはずである。なぜなら、そのような感応は当初存在したとしても、身体に有害であることがほとんど確実なので、感応を起こしやすい傾向は、進化の過程で淘汰されてしまうと思われるからである。一方、異なった身体間の感応は、無害なものとして存在してきたであろうし、積極的に有益なものとして発達もしてきたであろうと、少なくとも理論的には考えられる。

塚本も指摘しているように、「遠い距離に於てある人の脳の細胞と、他の人の脳の細胞が感じて一種の科学的変化を起すと」云々の津田君の言葉は、右のポドモアの説明、特に二番目の書き入れ部分を受けたものであろう。ポドモアは、感覚内容や心的イメージがテレパシーで伝えられる事例を多数収集しているが、単に事例の収集に終わらずに、テレパシーのメカニズムをも論じようとしている。「近頃ぢや、有り得ると云ふ事丈は証明されさうだよ」という津田君の言葉は、ポドモアらの試みを念頭に置いたものと思われる。

しかし、塚本は、先に問題にした箇所だけしか引用していないから、ポドモア理論の妥当性・信憑性を判断するのはむずかしいが、右のようにその前後をも引用して吟味すれば、その杜撰さや胡乱さが見てとれる。なにしろポドモア当人が、「神経過程の究極的な性格に関する私たちの無知がほとんど完璧に近いので、克服しがたい障害に遭遇する危険を冒さずに、事実とは無関係な形で理論を組み立てるのを許している」と認めているほどである。光線電話や電気バッテリーの仕組みに依拠した説明は、比喩的な

アナロジーであって、説明の体をなしていないと言わざるをえない。光線電話や電気バッテリーとテレパシーとが同一のメカニズムに基づいて作用していることを裏付ける根拠は何も示されていない。漱石が本気でテレパシーが「有り得ると云ふ事丈は証明されさうだよ」と信じていたとはとうてい思えない。

一柳廣孝は、「幽霊研究において心理学的アプローチが不可欠であることを自明のように語る物語の論理は、それが「神経」の作用であるとする論理を内包しながら、その一方で津田が読む『幽霊の書物』が示す論理＝テレパシー説をコンテクストとして抱え込んでいる。そのために、「幽霊」をめぐる論理の流通が分裂、破綻しているかのような印象を与える」[4]と述べている。「琴のそら音」では、幽霊現象を「神経」の作用として否定的に見る視点が打ち出されている一方で、『幽霊の書物』に言及したくだりでは、テレパシーの理論に基づいて肯定的な見方がなされており、二つの観点に「分裂」しているというのである。しかし、依拠したと推測されるポドモアの著作を吟味すれば、はたして漱石が心霊現象やそれに関する研究を肯定的に受け止めていたかどうかは極めて疑わしいと言わざるをえない。

二

漱石が学生時代に、アーネスト・ハートなる人物の「催眠術」を中途まで翻訳しているのはよく知られている。従来原典が明らかではなかったが、雑誌「一九世紀 *The Nineteenth Century*」第16号（一八九二年一―六月号）に掲載された「催眠術といかさま *Hypnotism and Humbug*」である。全部で一四頁にわたるが、漱石が訳出したのは、前半の七頁の中頃までである。すでに佐々木英昭がハートの著書『催眠術、メスメリズムおよび新たなる魔術 *Hypnotism, Mesmerism and the New Witchcraft*』（一八九六）に収録された文章から内容を紹介しているが[5]、私は、漱石が訳し残した部分の原文とその翻訳の発表を予定している[6]。

訳されている箇所では、催眠術に、施術者から発する「鐮気（じようき）」（＝磁気）や「電気」が作用するとする見解が否定されているだけでなく、施術者の意志が、被験者を催眠状態に陥らせるのに介入しているとの見解にも異議が差し挟まれている。ポドモアの『幽霊と意思伝達』に、「マダムBの場合の実験に関してジャネ教授が説明した箇所の冒頭の一節は、このケースでは、結局のところ、たとえ近接した場所であっても、催眠トランスを生じるには、施術者の自覚的な意志が必要であることを教えている」（一〇七～一〇八頁）とあるから、当時一部では、催眠術を成功させるには、施術者の意志が不可欠だと考えられていたのであろう。

漱石が訳し残した部分の冒頭には、大脳生理学的な説明があり、専門知識に不足を感じて、その直前で一旦筆を置いたのかもしれない。しかし、その部分は、催眠術のメカニズムを科学的に説明しようとした、極めて興味深い箇所である。

大脳を血液が循環しているが、各部位への血液供給量を調節することで、さまざまな身体的・精神的機能が生み出される。覚醒時は、脳の上層部には、豊富な血液が供給されているが、睡眠時には血液供給が押さえられる。自身を支配する意志を司る部位

は、大脳の上層部にあるが、睡眠時にはここに血液が供給されないために、意志の力が働かなくなる。

ところで、空腹時にご馳走を目にすると、唾液や胃液が分泌される。ご馳走の視覚的刺激が、唾液や胃液の分泌を司る部位への血液供給を促しているのである。同様に、ある特定の刺激を与えることで、大脳上層部への血液供給を抑制し、意志の働きを弱め、睡眠状態と類似した状態をもたらすことができると考えられる。かくして被験者を催眠状態に陥らせ、施術者の意のままに操る催眠術が可能になる。

――かなり乱暴に単純化しているが、催眠術のメカニズムは以上のようなものである。ハートの用いる用語で言えば、「反射作用」や「観念運動性もしくは感覚運動性の神経システム」に依拠して催眠術のメカニズムを説明しようと試みている。

こうした科学的に堅実な説明方法を採択しようとする姿勢から予期されるように、ハートは、心霊学の業績をかなり辛辣に批判している。

一八三七年、フランス・アカデミーは、いわゆる動物磁気をかけられ、目隠しされた被験者の驚異的な能力を調査するために、委員会を任命した。被験者のうさん臭い主張はすべて否認された。磁気も第二の視力（予知能力―藤尾）も、まったく存在しなかった。この報告には、異議が差し挟まれた。ビュルダン博士は、夢遊病者であろうとなかろうと、目を使わないで読むことができれば、だれにでも三千フランの賞金を提供すると申し出た。フランスのさまざまな地方から六人の候補者が名乗り出た。というのも、動物磁気や夢遊病は、当時の流行だったからである。新たな委員会が任命され、再び失敗に終わった。テストは一八四〇年一〇月まで行われ続けた。詐欺者のトリックが立て続けに暴露され、不面目な失敗が続いた後に、アカデミーは、誤って動物磁気とか千里眼とかと呼ばれる詐欺と愚行に関する情報には一切対応しないと決定した。（中略）

私が説明した主観的な現象（催眠術のこと―藤尾）に超自然的な要素と未知な力の発見を導入しようとする試みのうち、言及する必要がある唯一の事例は、いわゆる心霊主義者とテレパシー論者のそれである。これは、昔の愚説と欺瞞――自己欺瞞であることも少なくないが、詐欺である場合の方がずっと多い――を、新しい形式で蒸し返しているにすぎない。動物磁気論者や心霊主義者、中世のメスメリズム信奉者らが、かつて謬見を披瀝したが、このような愚説と欺瞞に覆われていた。神秘家やメスメリズム信奉者の信ずる魔女的・悪魔的な第二の視力や千里眼は、化けの皮を剥がれ、信用を失ったが、同じものが、過去という衣装からいくらか解放された世代により適合するような新しい名称のもとに、時折復活させられている。テレパシーは、メスメリズムの憑依状態や千里眼よりも、現代人の耳に快く響く。しかし、実質的な基礎を持たないのは同じことである。それは目を使わずに見、耳を使わずに聞き、特定の感覚の支援を受けずに印象を

授受できるかどうかを見極める試みである。心霊叩音の実践家、ダヴェンポート兄弟の仲間、ビショップの一味、読心術師、動物電気の実行者は、闇中に転げ落ちて、泥中に葬られた。テレパシーは過去の錯誤と詐欺を復活させようとする愚かしい試みである。この種の自己欺瞞が常にまとってきた疑似科学的な形式を帯びているが、はなはだ貧弱な形式であって、極めて空疎な成果しか出していない。幸いにも、テレパシーはごく少数の人々のあいだで信奉されているにすぎないが、主にこの国に限られている。私は彼らのことを口にするのを恥ずかしく思う。テレパシーは弱々しく生き延びているが、未熟なまま消滅する運命にあるのは疑いない。

漱石が心霊学の著書に触れるのは、ロンドン留学以降のことだが、塚本利明や荘千慧[7]も指摘するように、漱石も編集に携わり、当の翻訳「催眠術」を掲出した「哲学雑誌」は、創刊号（明20・2）以来、催眠術とともに、心霊学に関わる記事を頻繁に掲載していたから、ハートの非難が何を標的とするものかは、およそのところ了解できていたと思われる。その部分も含めて、「催眠術といかさま」の論旨に賛同したからこそ、その翻訳を思い立ったのではなかっただろうか。

漱石は、先のラングとポドモアの著書に加えて、オリバー・ロッジの『死後の生 *The Survival of Man*』（一九一〇）とカミーユ・フラマリオンの『神秘的な心霊力 *Mysterious Psychic Forces*』（一九〇七）も所蔵していた。心霊学に強い興味を抱いていたことは否定できないようだ。しかし、ロッジの著作には書き込みはまったく見られない。「思ひ出す事など」（明43・10・29～44・2・20）で、「標題に引かされて」「わざ〳〵外国から取り寄せた」（十七）と語ったフラマリオンの著作には、わりに頻繁な書き入れが見られる。たとえば、次の箇所（三三・三四頁）では、原文を添えた部分にサイドラインが引かれている。

数人がテーブルの周囲に集まり、手をテーブルの上に置き、何かが起こるのを待つ。五分か一〇分か一五分か二〇分か、時間は心霊的な雰囲気と実験参加者の能力によって変わってくるが、一定の時間が過ぎると、テーブルの中で叩音が聞こえてくる。あるいは、座った人々がテーブルの運動を促す。テーブルはまるでものに取り憑かれているように見える（Several persons group themselves about a table, place their hands upon it, and wait for something to happen. At the end of five, ten, fifteen, twenty minutes, the time depending on the psychic atmosphere and the faculties of the experimenters, raps are heard in the table, or the sitters help in the movements of the table, which seems possessed.）。（中略）ときおりテーブルは一本かそれ以上の脚を支えにして持ち上がり、ゆっくりと前後に揺れる。ときには、テーブルに置かれた手に付着しているかのように、浮き上がり、二秒か三秒か五秒か一〇秒か二〇秒か、空中に浮かんだままでいる。また、通常の重さの二倍か三倍の力で床に釘付けになったりする。別の折には、普通は要求さ

れればだが、鋸や斧などの音を立てたり、鉛筆で物を書いているような音を出したりする。私たちは直接の観察から得られた決定的な結果を手にしており、それらの結果が未知の力の存在を証拠立てているのは否定しがたい。

この力は心霊的なものに分類される重要な力である。もし私たちが実験参加者が手を置いているということだけでは説明がつかず、実験参加者の意思だけに従ってあれこれの形をとる、目に見えない超感覚的な力をじっくりと吟味するなら、神経力ないし身体的電気が形を変えたものとして説明しうる新しい未知なる力の存在に関する証拠を目にすることになるかもしれない。しかも、その力自体が多量に存在するかもしれない。しかし、テーブルの中で、あるいはテーブルの脚で生じる叩音は、受けた質問に回答する。テーブルに問いかける際には、テーブルがただの木片にすぎないと承知しているから、私たちは本当は聞いたり答えたりする何らかの精神的な主体に話しかけているのである。現代的な心霊主義が勃興したのは、この種の現象においてである。すなわち一八四八年合衆国で、フォックス姉妹が部屋で壁や家具が叩音を発するのを聞いたのが始まりである（It was in this class of phenomena that modern Spiritualism took its rise; namely, in the United States, in 1848, when the Fox sisters heard sounds in their chamber, —raps in the walls and in the furniture.）。

テレパシーを論じるポドモアも、大脳内の思想に対応する、大脳外のエネルギーの存在を仮定していたが、フラマリオンも、「新しい未知なる力」を想定している。四二二頁でも、「人間は内部に流体的・心霊的な力——その性格はまだ分かっていないが——を所有しており、その力は隔たった場所にある物体に働きかけ、それを動かすことができると、まず最初に結論することが許されるだろう」と述べている。

ハートの特徴は、この種の「未知なる力」を仮定した立論を避けている点にある。彼は、彼が「先延ばしされた暗示」と呼ぶ、いわゆる後催眠性暗示——ハートの挙げている例を引けば、「来週の今日、所定の時間に催眠状態に戻り、所定の場所に行き、これこれの物品を盗め。あるいは、これこれの人物を攻撃せよ。ただし、だれが命じたかを覚えていてはいけない」と命じ、実行させる類いの暗示——の現象を説明する際にも、「未知なる力」の存在を仮定していない。ハートは、次のように述べている。

私たちの日常的な知識の範囲内に、これにさえ手がかりを与えてくれそうな事実が存在する。あらゆる神経の活動と大脳の作用には、時間的な要素が存在する。「汽車に乗らなければならないから、明日の朝は六時に起きよう」と独り言を言って、就寝するのは、極めてありふれたことである。これは、数時間前に指示された時間に作動する先延ばしされた暗示のありきたりの事例である。神経系に異常があれば、マラリア熱の震えの発作が、三日ごとあるいは四日ごとの決まった時間にぶり返すことがある。飢餓感は食事をとる習慣に

なっている時間ごとに襲ってくる。神経系のこのような周期的・規則的な不随意作用が催眠術に導入されているのである。大脳の能動的・受動的な働きのなかに、時間的要素のもっと複雑な別な事例が存在する。一年のうちで規則的な間隔を置いて現れる、別の性格的特徴や異質な能力を備えた二つの異なる人格が、単一の人間のなかに存在していると判明したケースが、厳密に観察され、徹底的にその真正性を証明された形で二、三例存在している。（中略）このような事実を想起するだけで、先延ばしされた暗示に時間的要素を導入することは、超自然的なものとは無関係であること、個人に新たな能力を付与することを意味しないこと、単にあらゆる脳に多少とも生得的に備わった働きを利用して、催眠術をより発展した高度な段階に導いているにすぎないことが充分明らかになるだろう。

ハートは続いて、催眠術を説明するのに、「超自然的な要素と未知な力の発見を導入しようと」「試み」ている代表例として、心霊主義者とテレパシー論者を挙げているので、自身と彼らとの相違が未知なる力やエネルギーの存在を安易に想定するか否かの点にあり、彼らの非実証的な態度を回避しようと意識的に努めていることが分かる。心霊学は科学を「相対化」したと評価されているが、不確かな仮説に依拠して科学の枠組みを揺るがしたとしても、はたしてそれを「相対化」と評価できるだろうか。

話題をフラマリオンの『神秘的な心霊力』への漱石の書き入れに戻そう。引用した箇所の他にも、霊媒ユーサピア・パラディーノの驚異的な実演や、それに対するロンブローゾの反応に触れた箇所など（六六、八一、一三八、一四一、一五一、一七三頁）にも、書き込みが見られる。ただし、最後の書き込みは、一七三頁のそれで、本文だけで四五四頁に及ぶこの本のそれ以後のページへの書き込みは残されていない。おそらく読むのを放棄したのであろう。

他の三冊の心霊学の書物に残された書き込みも同様だが、残されているのはサイドラインが多く、アンダーラインはまれである。先に引用したポドモアの『幽霊と意思伝達』の一節にあったように、専門用語や人名などに下線が引かれている。熱中して読んだ本には残されることの多い文字の書き入れは一切見られない。

以上の吟味からも明らかなように、心霊学に関する著作を四冊も所蔵していたにもかかわらず、漱石は決して熱心な読者ではなかった。心霊学的な主題には関心があったが、論理の粗雑さや研究方法の杜撰さに対して批判的にならざるをえなかったのであろう。その点、学生時代に共感して翻訳の筆をとったアーネスト・ハートに近い立場であったと考えられる。

「琴のそら音」の末尾は、「文学士津田真方著幽霊論の七二頁にK君の例として載つて居るのは余の事である」の一句で閉じられている。しかし、さまざまな因子に欺かれて、許嫁の死というありもしないメッセージを聞き取った「余」の体験は、実質的に「幽霊」の存在を否定し、幽霊にまつわる現象を自己暗示の所産とするものと言える。そういうエピソードを収録している津田君の

『幽霊論』は、幽霊の存在に懐疑的な書物なのかもしれない。おそらくそれは漱石自身の立場でもあっただろう。

注（1）「「琴のそら音」とその背景」（「学苑」第332号、昭42・8）。
（2）「琴のそら音」（『漱石と英文学 「漾虚集」の比較文学的研究』平11・4、彩流社）。以下、塚本への言及はすべて同じ。
（3）ないとうふみこ訳『夢と幽霊の書』（平29・8、作品社）の第五章。
（4）「〈科学〉の行方 ――漱石と心霊学をめぐって」（「文学」第4巻第3号、平5・7）。
（5）「若年の翻訳「催眠術」」（『漱石先生の暗示』平21・8、名古屋大学出版局）。
（6）「夏目漱石訳「催眠術」の未訳部分の原文と翻訳」（「大東文化大学紀要」第57号、平31・3）。
（7）「漱石における心霊主義の受容 ――「哲学雑誌」を踏まえて」（「阪大近代文学研究」第10号、平24）。

〈付記〉翻訳文中のフランス人名の発音に関して、大東文化大学教授千葉一幹氏から教示を受けた。漱石の手沢本の調査には、仙台文学館から便宜を与えられた。

新刊紹介

山口直孝編『漢文脈の漱石』

二〇一七年三月に開催されたシンポジウム「漢文脈の漱石」に基づく論文集。漱石における漢文学の新たな位置付けを目指す九本の論考が収録されている。

「漱石と漢詩文」は『草枕』『虞美人草』および修禅寺大患以降の漢詩から、漱石にとっての漢詩文が西洋への批評的視座として機能していたことを示し、「〈文〉から〈小説〉へ」では明治期における文体への感性の変化を論じた上で、近代小説に漢文学を利用し続けた漱石の試みを捉える。「漱石の漢詩はいかに評価・理解されてきたか？」では研究史に踏み込みつつ新たな漱石漢詩評価の可能性を探り、「夏目漱石の風流」では漱石が「風流」と表現した心境の中に、中国の古典詩とも日本漢詩とも異なる独自の文学性を見る。

また「漱石文学の生成」では『木屑録』にまつわる正岡子規による漱石評価をもとに『行人』再評価を行い、「『友情』の中の漢文脈」では正岡子規宛書簡と「倫敦消息」「自転車日記」の分析に基づいて、『草枕』を漢文脈による表現実験が限界を示した転換点と位置付ける。

さらに漱石の漢学塾時代を考察し、初期作品における漢学者の描写等からその漢学教養形成を捉えた「漢学塾のなかの漱石」、漢語を起源としながら近代以降意味を再編された「趣味」概念を取り上げ、漱石の文学理論を論じた「夏目漱石の「趣味」の文学理論」、そして漱石が熱心に読んでいたという『禅門法語集』と『夢十夜』『行人』を比較しながら、漱石の思想・文学における禅の位置付けを試みた「夏目漱石の禅認識と『禅門法語集』」等、いずれの論も漱石漢文研究に新たな視点をもたらしている。

漱石研究だけでなく、西洋的知への転換を迫られた当時の知識人たちが漢学をどのように応用したのか、そのダイナミズムをも捉えた意義深い論集となっている。

（二〇一八年三月　翰林書房　A5判　二〇八頁　本体三〇〇〇円）

〔須田慎吾〕